

地球研本研究（F R）プロジェクトに係る事後評価書

2007年 3月 1日

研 究 課 題	地球規模の水循環変動ならびに世界の水問題の実態と将来展望
研 究 期 間	平成14年4月1日 ～ 平成19年3月31日
プロジェクト・リーダー	鼎 信次郎
研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針によく適合し、当初の研究目標はほぼ達成された。 評価委員会のメンバーのコメントは以下の通りである。 [1] ヴァーチャルウォーター貿易の定量化は非常に重要な功績だ。水危機の新しい側面がとらえられた。 [2] 社会科学的な観点から見て、きわめてすぐれた研究である。Originality にも富み meaningful である。 [3] 動機—目的設定—データ蒐集—アセスメントまで決めて説得的。Virtual Water という概念も極めて有効に使われている。結論も判り易い。Water Bank に関する提言も良い。 [4] 本プロジェクトにおいて地球レベルでの過去100年間にわたる陸域水文量の変動が調べられ、同時に将来100年についても推量している。その中で食糧や製品の貿易による仮想的な水の出入り(Virtual Water Trade: VMT)を考慮し、過去数十年のVMT量を算定している。また具体的な地域の水問題を対象に、ダム等のハード面と法整備等のソフト面の重要性を述べている。その成果は地球研の設置目的や研究目的と適合しており、当初の研究計画・目的をほぼ達成している。 [5] ヴァーチャルウォーター貿易という新しい概念を適用することにより、本プロジェクトの豊かな調査結果に興味深い議論を加えることができた。 [6] 水収支について Virtual Water という概念を使うことによってこれまで自然科学的にとりあつかわれることが多かったが、水がどのような社会的な物事（たとえば農業のありようや農産物の輸出入）等と深くむすびついていることを示すことによって文理融合の色合いをおびた領域に変えた貢献は大きいだろう。 [7] これは世界の水貿易と収支に関する新手法である。独創的で興味深い解明方法ではあるが、人間と自然の相互作用というよりも人間と人間の相互作用だ。未来可能性に貢献するかどうかははっきりしていない。 [8] 自然科学と社会科学の組み合わせから得られた見事で独創的な結果だ。地球研の理念にとって重要性は非常に高い。国際的に強いリーダーシップを発揮している。次のステップは、この新しい情報を経済学者に伝え、経済学者のフィードバックを得ることだろう。 [9] 本プロジェクトを IPCC（気候変動に関する政府間パネル）に結びつけたことは称	

賛に値する。地球の水を結びつける基礎研究を中心に今後もプロジェクトを広げていくことを高く推奨する。

[10] 水ストレス、「リアルウォーター」、「ヴァーチャルウォーター」の定量化は、今後の計画をたてる上で有用だ。

[11] 本プロジェクトは成功だ。本プロジェクトの期間中に得られた貴重なデータ、情報、経験を、将来のニーズに備えて、どのように保護できるだろう？

本プロジェクトだけではなく、今朝発表されたすべてのプロジェクトに関連して、以下のコメントをさせていただく。

①多くのプロジェクトは、学際的なプロジェクトのための方法を構築することを目指していた。方向性は正しく、地球研の成功した側面だ。

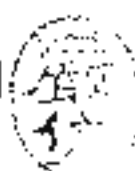
②大半のプロジェクトで国外の地域でのフィールドワークを行なっている。これほど多くの地域で行なわれていて、すべての地域が良い選択だと考えられるだろうか？あるいは地球研は、長期にわたる安定した活動を行なうために優先地域を選択するべきだろうか？

ホスト国の科学者や研究機関と永続的なパートナーシップを築くことが理想的だ。この点の実現についてはやや心もとない。

地球研研究プロジェクト評価委員会委員長

巖 佐 庸

印



委 員

(別添のとおり)